新天皇即位
奉祝記念特集

「御大礼の来歴と意義」に寄せて

橋本富太郎

令和元年（二〇一九）の五月一日、天皇陛下が践祚され、皇位継承に伴う一連の儀礼を滞りなく執り行われた。公益財団法人モラロジー研究所は、この慶事を迎えるに先立ち、皇室に関する資料の収集・研究・発信を組織的に行うため、平成三十一年四月、「伝統文化研究室」を設立した。この構想は、同研究所の創立者・廣池千九郎博士（一八六六～一九三八）の業績にまでさかのぼる。

一　廣池千九郎博士の遺志

歴史家を志していた廣池は、二十七歳で『皇室野史』（明治二十六年）を著し、やがて『古事類苑』編纂員となってから、国学者・井上頼圀の示唆を受け、皇室の万世一系の理由を課題として本格的に皇室研究に携わった。その後、神宮皇學館の教授時代に『伊勢神宮』（明治四十一年）を著し、皇室の万世一系は、皇祖天照大神の古伝にみられる道徳性の高さに起因すると結論づけた。

この成果にもとづき、主著『道徳科学の論文』（昭和三年）に展開した道徳論の中で、皇室を二つの視点から詳細に検討するに至る。一つは、道徳実行者の系譜として世界の五つの「道徳系統」の一つに皇室を挙げて相対化し、他の道徳系統と共にその普遍的な価値を顕彰している。もう一つは、恩人の系列として「親・祖先」と「精神的指導者」に「国家」を加え、皇室を「国家伝統」と称し、「伝統」の三者の一つとして位置づけたのである。

その廣池は、自ら道徳実践者として、皇室から蒙った恩恵に

応えるため、教育事業の理念に「国家伝統」への報恩を支柱に置き、その方法も「国家伝統」に倣うものとした（「寄付行為と謝恩行為に関する訓示」『教訓抄』九七頁）。最晩年に口述筆記した自伝にも、自らの歩みを「只、皇室の御為、国家の為を思はしていただいて遂に今日に及んだ努力の歴史」と振り返り、「私の一生の事業は我万世一系の国体を擁護し奉つて行かうと云ふ事の外何物をも含まなかつた」と評するほど徹底している（『予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟』四六頁）。

二　モラロジー研究所の動向

モラロジー研究所では、このような廣池の遺志を受け継ぎ、にもとづき、皇室に関する研究と教育を継続してきた。

研究においては、浅野栄一郎や美和信夫らの資質・関心によるところが大きい。また教育においては、生涯学習講座の「伝統の原理」に関する講義などで、「恩」の概念にもとづいた皇室観が展開されている。

さらに、それを本格化するため、平成二十四年度から所功を中心に、「皇室関係資料文庫プロジェクト」を発足させ、資料の収集・研究・発信に努めている。平成三十年には、そのメンバー（所功、久禮旦雄、橋本富太郎、後藤真生）により『皇位継承の歴史と廣池千九郎』が刊行された。

三　「伝統文化研究室」の設立

これらの経緯をふまえて、恒常的な人材の確保・育成、重要な史資料の収集・研究・発信を組織的に展開するため、平成三十一年四月に設立されたのが「伝統文化研究室」である。

名称の「伝統文化」には、モラロジーで言う「伝統」の文化に主眼を置いており、その中心は「国家伝統」たる皇室にほかならない。

当研究室では、関連領域の碩学を客員研究員に迎え、専門的な研究会を重ねると共に、その成果を盛り込んで、展示や講演会なども行っている。

四　大礼奉祝の特集

この度の特集は、令和元年にモラロジー研究所主催の展覧会で実施された連続講演会の内容を収録したものである。

① 所功「令和の即位礼と大新嘗祭―高御座と米・粟に見る日本の伝統文化―」は、特集の総論に位置づけられる。多年の宮廷儀式研究に基づき、即位礼と大嘗祭にみられる伝統文化を横断的に俯瞰したものである。

②久禮旦雄「元号制度の来歴と新元号「令和」の意義」は、皇位継承と不可分な改元に焦点を当て、元号の発生と歴史、中国や西暦との関係などを踏まえ、新元号「令和」について多角的に検討している。

③山田蓉「皇位継承に伴う宮中祭祀」は、大嘗祭をはじめとする御大礼における主要な祭儀について、年中恒例の祭祀との関連を踏まえながら、掌典として体験した現場に即して要点を解説したものである。

④後藤真生「令和大礼関係の諸儀式・祭祀の日程表」は、各論考と御大礼の全体的な流れを理解する便宜のため付載したものである。

なお、宍戸忠男「御大礼諸儀と御装束」については、『モラロジー研究』次号の掲載を予定している。

全体の企画調整と司会進行は、室長の橋本富太郎が務めた。